田辺町埋蔵文化財調査報告書　第20集

京都府田辺町

宮の口４号墳発掘調査概報

１９９５

田辺町教育委員会

序

本町には祖先が守り残してきた歴史的遺産が数多く残されていますが、それ以外にも土の中に埋もれている遺跡（埋蔵文化財）も数多くあります。

そしてこれらの遺跡も祖先が伝えてきた歴史的遺産と同様に、私たちの共通の財産として大切に後世に伝えて行かなければなりません。

今回調査を実施した宮の口４号墳は、一昨年新たにみつかった７世紀の古墳です。残念ながら半分以上なくなっていましたが、宮ノ口集落の成立を考える上で重要な遺跡であるといえます。

最後になりましたが、調査にあたって、宮ノ口区の方々をはじめ多くの方々のご協力・ご指導を頂きましたことを厚くお礼申しあげます。

平成７年３月

田辺町教育委員会
教育長　吉山　勝平

例　　言

1. 本書は田辺町教育委員会が行った京都府綴喜郡田辺町大字宮津小字白山41番地に所在する宮の口４号墳発掘調査の概要報告である。
2. 調査は平成６年度の国庫補助事業として実施した。
3. 現地調査は平成６年７月18日に開始し、11月30日に終了した。
4. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体……田辺町教育委員会
調査責任者…田辺町教育委員会　教育長　　吉山勝平
調査指導……京都府教育委員会
京都府立山城郷土資料館
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
同志社大学校地学術調査委員会
田辺町文化財保護委員会
調査担当者…田辺町教育委員会　社会教育課　　鷹野一太郎
同　上　　中井　英策
調査事務局…田辺町教育委員会　教育次長　　中川　勝之
同　社会教育課　課長　　奥田　　清
同　　課長補佐　　木下　敏巳
同　　社会教育係長　小西ケイ子
調査参加者…内藤雅貴・細辻嘉門・石橋明子・高木仁美・小野香織・梅野佐紀
赤堀直樹・米田拓真・吉川正治・嵜嶋善治・木元　猛・木元正治
植西美津子・原クニ江

5. 調査を実施するにあたり、白山神社（代表役員　中川　正）・宮ノ口区に多大のご協力を賜った。記して感謝の意とします。
6. 調査期間中及び本書を作成するにあたっては次の方々よりご教示を賜わった。記して感謝の意とします。（敬称略・順不同）
松村　茂、森下　衛（京都府教育委員会）、久保哲正（京都府立山城郷土資料館）、高橋美久二・奥村清一郎（財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター）、鈴木重治・辰巳和弘（同志社大学校地学術調査委員会）
7. 本書の執筆・編集は鷹野・中井が行った。

目　　次

１．はじめに ……1
２．位置と環境 ……2
３．調査経過 ……4
４．遺構 ……6
５．遺物 ……9
６．まとめ ……11

1．はじめに

宮の口古墳群は京都府綴喜郡田辺町大字宮津小字白山41番地に所在する後期古墳群である。同地に所在する白山神社の裏山に古墳が存在するのは知られていたが、昭和48年に白山神社西側の丘陵斜面を土取りと広場の拡張のために掘削していたところ、横穴式石室の石材と思われる石が露出した。通報を受けた町教育委員会は府教育委員会に連絡をとり、府教育委員会によって石室の確認がなされた(宮の口２号墳)。遺物等の出土はなかったようである。

近年、昭和48年当時の掘削跡が切り立った崖になり崩落の危険性が出てきたため、崖の法面を一部修正する工事が平成５年７月に行われた。その直後松村茂氏が同地を訪れ、須恵器の高杯などが転落しているのを見つけ、鈴木重治氏とともに古墳であることを確認し、町教育委員会に連絡された。

町教育委員会では直ちに現地を確認したところ、崖面に横穴式石室の掘方及び石材が露呈していたものであり、名称を宮の口４号墳とした。その後町教育委員会は府教育委員会と協議した結果、平成６年度に国庫補助事業として発掘調査を行うことにした。

なお、土地所有者である白山神社をはじめ、作業に従事された宮ノ口区の皆さん、学生諸氏、その他多くの方々の協力によって今回の調査が行われたことをここに記して感謝の気持ちとしたい。

調査地位置図

2．位置と環境

田辺町は、京都と奈良を結ぶ直線上のほぼ中間にあたり、その面積のほとんどが生駒山地に連なる京阪奈丘陵の東斜面になる。地形は南山城を北流する木津川にそそぎ込む小河川が開析した開析谷及び扇状地、木津川による沖積地によって形成され、小河川はほとんどが天井川化して独特の景観を呈している。そして田辺町は木津川を背景とする交通の要衝として古代より歴史の舞台となってきた。以下に古代を中心として歴史を俯瞰したい。

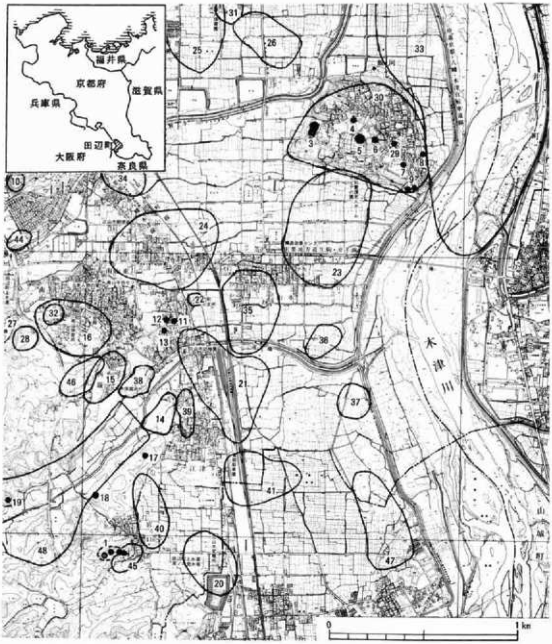
田辺町で確認されている最古の文化財は、天王高ケ峯の旧石器時代後期のサヌカイト製石核である。続いて、縄紋時代では山崎神社所有の石棒があるが、伝世品であるために出土地などは不明である。弥生時代になると遺跡の数は爆発的に増える。南山城では極めて珍しい前期の弥生土器が多く見つかった宮の下遺跡、南山城地方最大級の中期の方形周溝墓が見つかった南垣内遺跡、高地性集落の発掘の先駆けとなった後期の田辺天神山遺跡がその代表である。山城地方では木津川を挟んで見通しのよい台地に、高地性集落が散在している。集落の性格と目的を検証していくことが、今後の研究課題となっている。

古墳時代の前期、中期には首長墓が飯岡に造営された。飯岡は南山城平野に浮かぶ島の様にある独立丘陵であり、頂上からは奈良と京都を望むことができる。また町北部には周濠をもつ前方後方墳が2基並ぶ、全国でも珍しい例の大住車塚古墳・大住南塚古墳が存在する。この大型前方後方墳を造営したグループは墳形や立地から飯岡のグループとは別集団だったと思われる。集落としては布留式土器が多量に出土した興戸遺跡・大切遺跡などが挙げられる。田辺町周辺で特筆できる事は北部の大住車塚古墳・大住南塚古墳を造営した集団が衰退した後、この北部地域ではいわゆる後期群集墳が発達せず、横穴墓が墓制として取り入れられていることである。

田辺町の横穴式石室の代表はシオ1号墳で南山城地方では貴重な天井石の残る石室である。他では同志社大学校地内に保存されている下司古墳群が挙げられる。

奈良時代以降には普賢寺、興戸廃寺、三山木廃寺などの寺院が建立され、また山本駅に代表されるように交通の要所として栄えた。中世にはその軍事的価値をめぐる争いの舞台となった。宮ノ口区の白山神社の本殿は享禄5年（1532）に建てられたもので、慶長4年（1599）の棟札があり、国の重要文化財になっている。また神社境内には永享5年（1433）の石灯籠があり、西念寺にある平安時代の十一面観音とともに、白山神社の神宮寺であった法雲寺のものとされている。

平成4年に変電所の建設に伴い宮の口遺跡の調査が行われ、古墳時代（6世紀後半～7世紀前半）の土器溜まりと鎌倉時代後期の池跡・掘立柱建物群跡・曲物を使った井戸跡などが見つかっている。



番号－遺跡番号－遺跡名称－種類

1－66－宮の口古墳群	調査地	17－62－江津古墳	古墳	32－ 99－南山城跡	城跡
3－35－飯岡車塚古墳	古墳	18－63－宮津古墳	古墳	33－136－	散布地
4－36－弥蛇山古墳	古墳	19－64－菖蒲谷古墳	古墳	34－138－野神遺跡	散布地
5－37－ゴロゴロ山古墳	古墳	20－72－宮の口遺跡	散布地	35－139－直田遺跡	散布地
6－38－栗師山古墳	古墳	21－73－宮の下遺跡	散布地	36－140－遠藤遺跡	散布地
7－39－金泥山古墳	古墳	22－74－山崎北方遺跡	散布地	37－141－下川原遺跡	散布地
8－40－トヅカ（キンリンサン）古墳	古墳	23－75－古屋敷遺跡	散布地	38－142－	散布地
9－41－飯岡横穴	古墳	24－76－田中遺跡	散布地	39－143－佐牙垣内遺跡	散布地
10－42－田辺天神山（三山木）遺跡	集落跡	25－77－南垣内遺跡	散布地	40－144－屋敷田遺跡	散布地
11－54－山崎１号墳	古墳	26－78－宮の後遺跡	散布地	41－146－桑町遺跡	散布地
12－55－山崎２号墳（八王子塚古墳）	古墳	27－93－口駒ケ谷古墳	古墳	44－155－七瀬川遺跡	散布地
13－56－山崎３号墳（権現塚古墳）	古墳	28－94－口駒ケ谷遺跡	館跡	45－156－白山遺跡	散布地
14－58－三山木廃寺	寺院跡	29－95－飯岡東原古墳	古墳	46－157－木原屋敷跡	館跡
15－59－西羅遺跡	散布地	30－96－飯岡遺跡	集落跡	47－168－元屋敷遺跡	散布地
16－60－南山遺跡	散布地	31－97－草路城跡	城跡	48	散布地

周辺遺跡図

3．調査経過

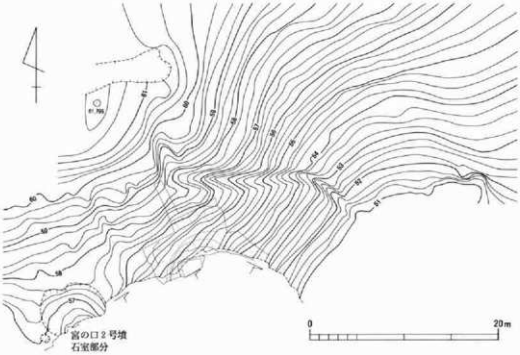
白山神社本殿（重要文化財）

現地は白山神社の所有で神社の周辺は雑木が生え、過去には杉の植林が行われていた。尾根の西側には竹林が広がっている。

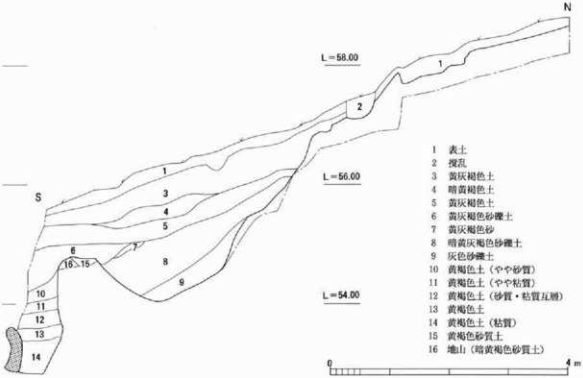
調査着手前に、古墳周辺の伐採はほぼ終了していたために、まずトレンチの設定を行い、それにあわせ追加の伐採を行った。

トレンチはすでに崖面で確認されている石室の掘方を中心軸に設定した。地形図は任意の杭を設定し、4ｍメッシュで地区割りをし、平板図を1/100で作成した。

トレンチを設定した後、人力で掘削を開始したが、墳丘の土らしいものは見つからず、また遺構の掘方も見つからなかった。そこで、トレンチをもう少し尾根の上部まで延ばすことにし、掘削したところ表土のすぐ下から地山らしい層が現れた。地山は、砂質土と粘土層が縞状に堆積する。その地山を下方に向かって追跡したところ、崖の端面より約６ｍのところで落ちこんでいくのが確認できた。この落ち込みが古墳築造時の、平坦地造成に伴う階段状掘り込みの肩らしいことがわかったので、この落ち込みの底面を見つけるためにトレンチ内の掘り下げ



トレンチ配置図



南北方向土層図

を急いだ。

調査風景

石室の上部に堆積する土は黄灰褐色土を基本に、砂や礫が混じる層を含んで、東西断面では西から東に流れ込む様を見せる。黄灰褐色土下層には他の古墳からの流入と思われる陶棺の破片が混入しており、隣接した古墳の墳丘の土である可能性もある。陶棺の破片は黄灰褐色土系堆積土の最下層もしくは最下面に多く見られ、細片のため図示できないが瓦器椀等も含まれる。また、南北方向には階段状掘り込みの肩から、墳丘の立ち上がりラインに続き、墳丘を押し流す様な形での堆積がみられる。これらの堆積の下層には、階段状掘り込みの壁面が崩れた灰色の砂質土が堆積する。L字形掘り込みの底面の地山は砂層に近接し、墳丘の整形段階に生じた溝状部分は砂質土層を切りこんでいるために非常に崩れやすい。このことは墳丘が崩壊した原因のひとつとして考えられる。

階段状掘り込みの上面ラインは、一番奥ではやや直線的に走るものの、全体を見れば弓

状にカーブしている。立体的には漏斗を半割したような形になる。墳丘外のベースには古墳の周溝がめぐるために平らな部分はほとんどなく掘削したスペースを最大限墳丘築造のために利用している。

4．遺構

墳丘に利用する土は古墳の周囲を溝状に掘削し、その際の排土を盛り上げるのが一般的な方法である。また、尾根などの自然地形を利用して古墳を築造する場合、形を整えるために地形の一部に手を加えることがほとんどである。宮の口4号墳は斜面に立地するために、また石室構築作業を容易にするために、斜面を階段状に掘り込み古墳築造の基礎となる平坦面を造成したものと考えられる。

削り込み検出状況（東から）

造成された平坦面上に墳丘が築かれた後、整形の過程があったと思われる。このときに山側基底部の平坦面がさらに削り込まれて古墳の山側裾をめぐる溝ができたと思われる。この溝の形から墳丘の形は円または楕円で円墳と推定できる。直径は溝の底面の高さで6～7ｍであった。溝の深さは最大で約0.6ｍで、墳丘の高さはさらにあったと思われる。

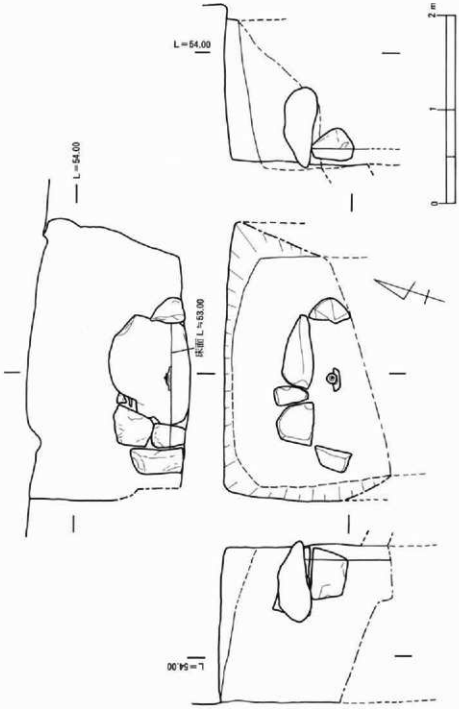
石室

石室は前記の平坦面上を精査した結果、見つけることができた。石室の天井石は既になく、内部に流入していた土は、基本的に黄灰褐色土で陶棺が混入していた土と同じであるが、やや砂質がかっている。

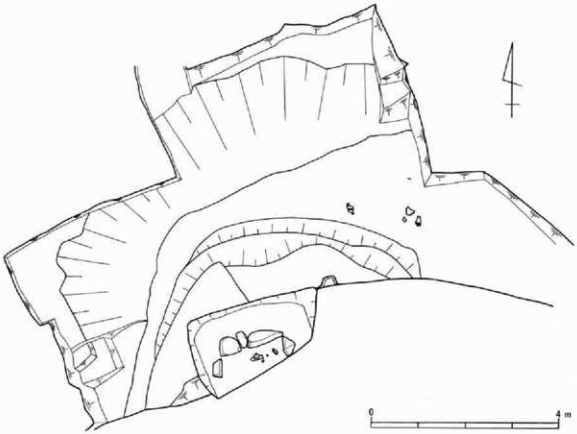
作業風景（東から）

石材の裏ごめの土は、やや粘質が勝る黄褐色粘質土で均一な土質である。版築等の作業は認められない。

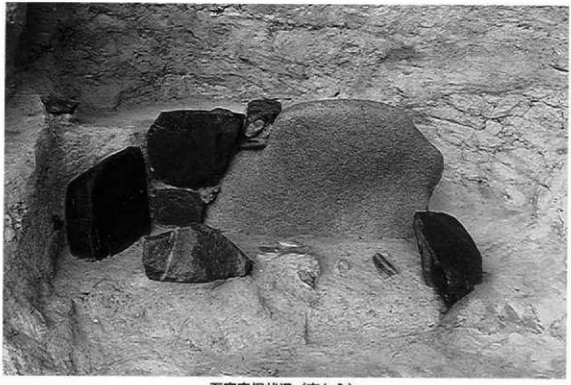
石室掘方の大きさは、幅約2.9ｍ・深さ1.7ｍ・長さ（奥行き）1.5ｍ以上で、ほとんどが流失していた。この掘方の中には石材が、奥壁4個、左右の側壁の石が1個ずつのみ残っていた。これらの状況から得られた残存石室内の規模は幅1.3～1.4ｍ・奥行き0.5～0.9ｍであった。



石室平面図



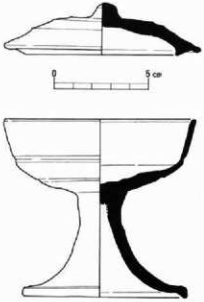
トレンチ平面図



石室完掘状況（南から）

5．遺物

見つかった遺物は少量である。大別すると、表土付近からの近世の遺物と、墳丘の基部となる平坦面に流入した中世、古墳時代の遺物、石室内の床面から見つかった古墳時代の遺物である。表土付近からの遺物はすべて土師皿で、隣接する白山神社で使用されたと思われる灯明皿がほとんどである。



須恵器実測図　S＝½
上：杯蓋　下：高杯

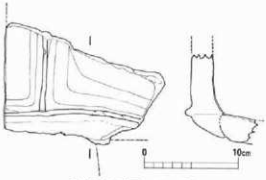
残存している石室内床面より須恵器杯蓋と土師器が見つかった。

杯蓋は、床面上にある棒状の石にのるような形で見つかった。口縁部内側に返りをもち、天井部には乳頭状のつまみがある。直径は10.6㎝で器高2.8㎝である。棒状の石には加工痕等は見あたらなかった。

土師器は杯蓋のすぐ東隣で出土したが残存状態が悪く細部は不明である。赤褐色の精良な胎土をもち、皿のようである。

また４号墳が発見されたときに、須恵器の高杯が採集されている。石室内から転落したものと思われ、口径10.0㎝で器高は9.5㎝である。焼成は堅緻で、色調は青灰色である。前述の杯蓋とともに７世紀前半のものと思われる。

石室内遺物出土状況



陶棺実測図　S＝¼

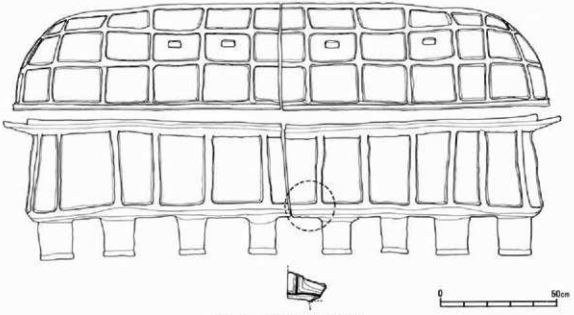
石室内の流入土より見つかった須恵器の甕は、焼成が悪く軟質であり、洗浄で溶けてしまうようなものである。

周溝からは、瓦器の細片や陶棺が見つかった。瓦器は細片であり非常に残り具合が悪いために図化できなかった。

陶棺はほとんどが、流入した土の最下層から見つかった。このことから、4号墳とは直接関連がなく、他の古墳にともなうものと見られるが、2号墳のものかどうかはわからない。

見つかった陶棺はいわゆる土師質亀甲形陶棺である。この種の陶棺のおおよその形は棺蓋と棺身に分けられ、外表面が凸帯によって分割されている。また蓋・身とも中央で二つに分割されたものが大半をしめる。見つかった部分は棺身で、蓋をうける鍔状の部位と、分割線に接した棺身の底の立ち上がり部である。立ち上がり部の破片には最下部の凸帯と縦にめぐる凸帯との交差部がある。凸帯は貼り付けで接着部はなでによって仕上げてある。凸帯によって区画された内部は、削りらしい調整が認められる。底部外面と内部にハケ目が認められる。胎土には砂粒が多く含まれ、焼成はやや軟らかく黄灰色を呈する。

同種の陶棺では京都府綴喜郡井手町の平山古墳から見つかった物が復元されているが、今回のものは、平山古墳出土のものより、一回り小さいものと考えられる。



井手町平山古墳出土陶棺
（文献3より再トレース加筆）

6．まとめ

宮の口４号墳は、直径が６～７ｍの円墳で、横穴式石室を持つ７世紀前半の古墳であることが今回の調査で判明した。

発掘前の予想に反して残りの悪い古墳であったが、不明であった宮の口古墳群の一端を知り得たのは大きな成果であろう。

この古墳は２号墳の東隣に接するように造られ、周囲にはまだ発見されていない古墳もあると思われる。このことから、この４号墳が位置する尾根は古代の宮ノ口地区の有力者の墓域であったといえよう。

宮ノ口地区における発掘調査で古墳時代の集落跡は見つかっていないに等しい。今後宮の口古墳群の基盤となる集落跡を確定し、現在の宮ノ口地区にどのようにしてつながっていくのかを調査することは、これからの課題といえよう。

参考文献

１）南　博史他『宮ノ口遺跡』京都文化博物館調査研究報告第10集　京都府京都文化博物館　1993

２）森下浩行『土師質亀甲形陶棺小考－北大和・南山城を中心に－』奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1993　奈良市教育委員会　1994

３）久保哲正『京都府井手町平山古墳発掘調査概報』井手町文化財調査報告第２集　井手町教育委員会　1987

平成７年３月30日　印刷
平成７年３月31日　発行

宮の口４号墳発掘調査概報
（田辺町埋蔵文化財調査報告書第20集）

編集・発行　田辺町教育委員会
〒610－03 京都府綴喜郡田辺町
大字田辺小字田辺80番地
電話　0774－62－9550

印　　刷　明新印刷株式会社
〒630 奈良市南京終町３丁目464番地
電話　0742－63－0661

宮の口４号墳発掘調査概報（田辺町埋蔵文化財調査報告書　第20集）

田辺町教育委員会